

マヤ二元論カバウイル

——マヤ民族文化における調和の思想と現代世界における意義——

実松 克義

1. 本論の目的と構成

筆者はこれまで四半世紀にわたりマヤ民族文化の調査研究を行ってきた。この小論の目的はマヤ民族の調和の思想である二元論、カバウイルに焦点を合わせ、その内容をマヤ文化の中で具体的に検証し、その本質を解明することである。初めにカバウイルとは何かについて述べる。その意味及び語源を歴史的に辿り、カバウイルの根本原理を説明する。次いでカバウイルとは何かを理解するため、(1) マヤ神話、(2) マヤのカレンダー、(3) マヤの十字架、(4) マヤ民族文化、(5) マヤの世界観に見られる様々なカバウイルの具体例を挙げる。またより普遍的な人間存在におけるカバウイルの考察を行う。以上を踏まえて、現代マヤ民族におけるカバウイルの思想である「マヤの宇宙観」とそこに見られる調和の思想に光を当て、その本質を解明する。最後にこの独特な二元論の思想を現代世界の中で再考察し、その意義について考えてみたい。

2. カバウイルまたはマヤ二元論

カバウイルとは何か。一言で言えば、異質な二者の協力によって世界の創造、あるいは発展がなされるということである。カバウイルはその原理を表している。

はじめにカバウイル (Kabawil) の語源とその意味について述べておきたい。

カバウイルはマヤ・キチュー神話『ポップ・ヴ

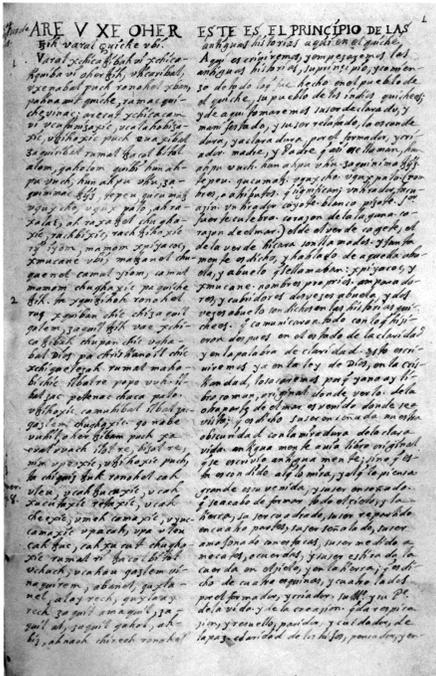
フ』ⁱ (1 参照) に登場する神々の中で最も古い神の一人である。神話の冒頭でマヤ世界の創造が行われる。この世界創造において最大の事業であったのが、天空の創造である。この創造を指揮したのは「天の心 (Ukux Kaj)」であるが、その時に天空に存在したのがカバウイルである。生涯にわたってカバウイルを研究したマヤ・キチュー哲学者ビクトリアーノ・アルパレス・フアレスによれば、カバウイルは「二つのヴィジョン」という意味であるⁱⁱ。キチュー語でKebは「2」という意味であり、またWilは「ヴィジョン」という意味である。カバウイル (Kabawil) はその合成語であり、したがって素直に解釈すれば、「二つのヴィジョン」ということになる。

カバウイルという表現は神話『ポップ・ヴフ』を発見したフランシスコ・ヒメネスの対訳手稿、巻頭の次の文章の中に表れる。

; quehe cut xax qo vi ri cah qonaipuch vqux cah are vbi ri cabauil chu qha xic.ⁱⁱⁱ

この中にare vbi ri cabauil (彼・名前は……と言う・その・カバウイル) という箇所がある。この文章は全体として意味が不明瞭であり、マヤ・キチュー言語学者、アドリアン・イネス・チャベスは、テキストを修正した上で、こう訳している。

「このようにして空は天上にあった。しかしそこには天の心がいた。その名前を「昼となく夜となく見る者 (Doble Mirada)」と言う』^{iv}



1. マヤ・キチエー神話『ポップ・ヴフ』巻頭 (左がキチエー語、右がヒメネスの訳)

Himmelblau, Jack. 1989. The Popol Vuh of the Quiche Maya of Guatemala: Text, Copyist, and Time Frame of Transcription. *Hispania*, 72 (1) : 97-122. P.118.

チャベスの修正と訳はこの古代神話の解説に新しい地平を切り開いたものだが、カバウイルを「昼となく夜となく見る者 (Doble Mirada)」と意識している。これはチャベスが敬虔なカトリックで、二元論的なマヤ思想との相克に悩んだためだと言われるが、無理のある解釈である。この一文は明らかに「天の心」の二元論的性格を明示している。ここで重要なのは「2」という数であり、カバウイルは「二つのヴィジョン」を意味する。したがって素直に「その名前をカバウイル (二つのヴィジョン) と言う」と訳すべきであろう。

カバウイルの語源、起源に関しては議論もある。ある説⁹⁾によれば、カバウイルは古典期マヤのK

神に起源を持つと言われる。この神はパレンケではGII神と呼ばれる神に相当するが、その別名は生産と豊穡の神、ウネン・カウイール (Unen Kawil) である。カウイールはまた冥界シバルバー¹⁰⁾の入り口でフナブ兄弟を欺いた「木の人形」(あるいは王位の錫杖) に由来するとも言われる。するとカバウイルの語源はシバルバーにあることになる。またキチエー文化の古い伝承によれば、かつて雌馬から創られたという「カブウェル (Cabwel)」という魔物が存在した。この魔物は地下の洞窟に住み、人間の生贄を要求したという。この魔物がカバウイルの起源であるとも言われる。ここにもまたシバルバーとの関連が見られる。この魔物はまたスペイン人による征服後、カトリックの守護聖人に置き換えられたとも言われる。これらを総合すると、古典期マヤのK神 (すなわちGII神、カウイール神) が後古典期において、分化して、洞窟の魔物カバウイルとなり、さらにそれがカトリックの守護聖人となったことになる。

以上の議論はマヤ文化におけるカバウイルの伝統が、歴史的に複雑な経緯を持っていることを示している。このことはこの神的存在がマヤにおいてそれだけ重要であったことを意味するものであろう。しかしここにおけるカバウイルの概念は、基本的に、古典期マヤ、後古典期マヤ、あるいはマヤ滅亡以降の変容、カトリックとの習合を表すものであると思われる。(そしてその一連の変化、複雑化はまた、マヤ社会の精神的退行を表すものであろう。)『ポップ・ヴフ』の前半部分の起源は明らかに先古典期にある。またそのストーリーは明らかに二元論的原理によって貫かれている。したがってカバウイルはやはり、ピクトリアーノ・アルバレスのように、「二つのヴィジョン」と理解するのが正しいと考える。

3. マヤ神話におけるカバウイル

カバウイルは、はじめに、神話『ポップ・ヴ

フ』の中にみられる思想原理である。この神話(前半部分)の中には多くの対になった存在が登場する。以下に代表的なものをいくつか挙げてみよう。

テペウとククマツツ

世界の始めにテペウ (Tepeu) とククマツツ (Kukmatz) という原初の神々が存在した。アドリアン・イネス・チャベスはテペウを「無限の存在」、またククマツツを「隠された蛇」と訳している。前者は宇宙の神 (天空の神)、また後者は大地の神 (海の神) であるが、両者の結合 (結婚) によって世界は創造された。現代マヤ文化ではこの両者は通常「父なる天空 (Ajau Tepeu)」、「母なる大地 (Chuch Kukmatz)」と呼ばれ、世界創造の父と母として位置付けられている。Tepeuは蛇、またKukmatzは翼の生えた蛇 (つまりナワトウル語の「ケツァルコアトル (Quetzalcoatl)」のキチュー語訳) を意味する。マヤ文化においては、これらは雄の蛇、雌の蛇としてみなされている。これは性的なカバウイルである。

ツァコルとビトル

カバウイルは常に性的な関係であるとは限らない。そのよい例がツァコル (Tzakol) とビトル (Bitol) である。これらは世界創造の際に、その大事業を実際に履行した神々である。通常、前者は「建造者」、後者は「形成者」と訳される。これはどういう意味か。一言で言えば、ツァコルの仕事は世界を創造することであり、いっぽうビトルの役割は創造されたものの手直しをすることである。これを建築に喩えれば、前者は新築専門であり、後者はリフォーム専門ということになる。マヤ世界においては、この両者の協力関係によって世界創造がなされた。これは実に興味深い考えである。いわゆる世界創造における役割分担、分業の存在であるが、それがあくまで異なった神々として存在しているのは世界でも稀であると思わ

れる。またツァコルとビトルの仕事は遠い過去に終了したわけではない。彼らは現在でもマヤ世界において存在し、世界を維持、発展させ続けている。

フン・フナブとヴクブ・フナブ

マヤ民族の偉大な祖父母であるイシュピアコック (Ixpiakok) とイシュムカネ (Ixmukane) の間に生まれた双子の兄弟である。フン・フナブ (Jun Junapú) とヴクブ・フナブ (Wukub Junapú) はマヤの知性、叡智を表すものであり、マヤ文明の基盤はこの二人によって築かれた。不運にも二人はシバルバーとの戦いに負け、生贄にされるが、マヤ文明の精神は次世代のフナブとイシュバランケによって引き継がれ、完成することになる。フン・フナブはまたマヤ文明の「最初の父」とも呼ばれ、マヤのトウモロコシの神でもある。

フナブとイシュバランケ

神話時代の終わりに登場する双子の英雄、フナブ (Junapú) とイシュバランケ (Ixbalamke) の関係もまたカバウイルの原理を体現している。フナブは男性 (または兄) であり、イシュバランケは女性 (または妹) である。この両者は互いに協力しながら、暴君ヴクブ・カキッシュとその一族、冥界シバルバーの大王を打ち負かし、マヤ文明を建設する。

フン・カメーとヴクブ・カメー

フン・カメー (Jun Kamé)、ヴクブ・カメー (Wukub Kamé) は地下帝国シバルバーを支配する二人の大王である。彼らはアツハカメー一族 (Aj Kamé、死の一族) の最高指導者として恐怖政治を実行し、シバルバーに君臨した。したがって悪のカバウイルである。だが英雄フナブ、イシュバランケ兄妹との戦いに負け、最後には冥界から抹殺される。



2. マヤ神聖暦 (2012 年、Publicado en Uspantán, Guatemala)

シバルバーの 10 人の王、軍事指揮官

シバルバーにはこの他にも大小様々の王、軍部高官が存在したようである。神話に述べられている 10 人の王、軍事指揮官はその代表であろう。興味深いのは、これらの存在が二人一組となって行動し、残虐行為を行うことである。シキ・リバット、クチュマキックは血の病気をもたらし、アハルプフ、アハル・カナは化膿させて感染症を引きおこし、チャミー・バク、チャミー・ホロムは人間の力を弱めて骨にし、アハルメス、アハルトコブは人間を裏切り、騙し討ちにし、シツク、パタンは路上の殺人を行う。これらも悪のカバウイルである。

以上、神話『ポップ・ヴフ』に登場するカバウイル的存在の例をいくつか挙げてみたが、この神話にはこうしたカバウイル的原理が至るところにみられ、ある意味でこの神話そのものがマヤ的二元論、カバウイルの思想を表現する目的で編纂された聖典である。



20の「日の名前の歯車」

3. マヤ神聖暦の仕組み (20 ナワールがエネルギー・レベルを変えながら進む)

4. マヤのカレンダーにおけるカバウイル

カバウイルの原理はマヤのカレンダーの中にもみられる。その代表が「マヤ神聖暦 (Sol K'ij または Tzolkin)」^{vi} (2 参照) の「20 ナワール (20 Nahuales)」^{vii} (巻末付録参照) である。20 ナワールは 20 キツヒとも呼ばれるが、キツヒ (K'ij) とはキチェー語で「日」という意味である。ナワールとは、キツヒの精神的側面を強調したものである。わかりやすく言えば、それぞれの日を持っているスピリットのことである。これを「日の神」あるいは「時間の神」と意識してもよいであろう。古代マヤ人は 20 の異なったナワールが世界を交代で維持・発展させていると考えた。(3 参照) これらの神々はすべて異なった特徴、性格、可能性を持っている。マヤ神聖暦はそれを具現化したものであり、20 ナワール x 13 サイクル = 260 日周期の宗教カレンダーである。

20 ナワールの数「20」はマヤ 20 進法、また人

間の手足の指の合計に基づいているが、その根底にあるのは世界の基本数として2が存在するという考えである。例えば20の内部構成は $10 \times 2 = 20$ である。これは人間の手の指、あるいは足の指の合計の倍数が20であることを意味する。また右半身の手足の指、あるいは左半身の手足の指の合計の倍数が20であることを意味する。

そして同様の構成は20ナワールの組み合わせ、内部構造においても存在する可能性がある。というのもこの20ナワールは実際には二セットの10ナワールであった可能性があるからである。この説によれば、例えば、一番目と十一番目、二番目と十二番目、三番目と十三番目、四番目と十四番目、五番目と十五番目等々には意味上の共通点が存在するという。これらはお互いに十離れたナワールである。つまり複数の共通点を持つペアのナワールが、それぞれ十離れて配置されていることになる。つまり20ナワールは実際にはペアになった10ナワールである。20ナワールに何故このような内部構造が存在するのかその理由は定かではないが、古代人マヤ人が、徹底して、2、あるいは対構造の存在にこだわったことだけは間違いない。

さらには20ナワールにはよいナワールも悪いナワールも存在しない。これらのナワールは全体として意味を持つものであり、相互に分割不可能な存在である。またそれぞれのナワールには必ず肯定的な要素と否定的な要素とが存在する。以下に、二つのナワールを選んで、これらの日に生まれた人間の基本的性格を記してみよう。

アハマック：

肯定的性格：勉強熱心、知的、記憶力がよい、尊敬される、忍耐を知っている、幻視者、慎重、分析的、頑固。愛において幸運である。

否定的性格：失敗で落ち込みやすい、獯猛、嘘つき、不貞、怒る、家庭問題がありうる。

カン：

肯定的性格：知者、誠実な、知的、リーダー、直観的。

否定的性格：怒りやすい、恨まれる、日和見主義者、また裏切り者になりうる。

20ナワールはある意味で人間世界の曼荼羅とも言うべき存在である。そこには人間に関するありとあらゆる事柄が網羅され、分類されて表現されている。それはあたかも人間の長所と欠点、善と悪、肯定的エネルギーと否定的エネルギーを一覧する百科全書でもあるかのごとくである。

5. マヤの十字架におけるカバウシル

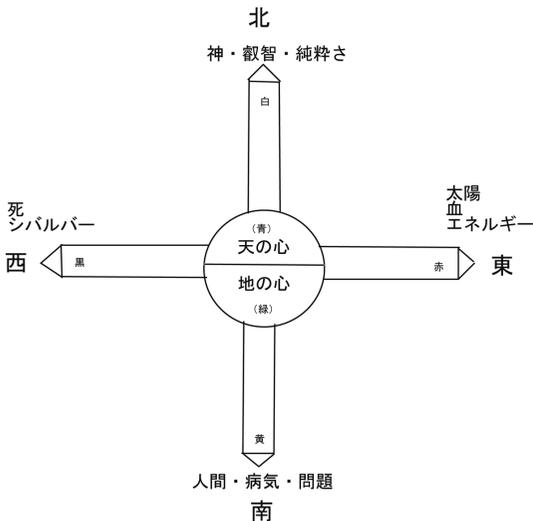
次にマヤの十字架[※]におけるカバウシルをみてみよう。マヤの十字架はマヤ文化の世界観を空間として表象したものである。マヤの十字架では縦、横の二本の直線が直角に交差している。ここにはマヤ二元論カバウシルが視覚的に具現化されている。

基本方位として表現されたマヤの十字架は(4)のような意味及び色を持っている。

また世界の四大要素としての十字架は(5)のようになる。これは現代マヤのシャーマン(「アッハキツヒ[※]」と呼ばれる)の祈りのことばでもある。すなわち「天の心、地の心、空気の心、水の心」である。

マヤの十字架はまた20ナワールを要素としても構成される。すなわち人間の運命のアディビナシオン(Adivinación)における十字架である。(アディビナシオンとは神託、予言、占いという意味である。)たとえば最初のナワールであるバツツを中心とした十字架は(6)のようになる。

この十字架において、アカバルはバツツから8個前のナワールであり、カウークは8個先のナワールである。またカンは14個先の、ノッホは14個前のナワールである。この意味は次の通りである。バツツの日に生まれた者は(象徴的な意味で)アカバルの日に受胎された。またその未



4. マヤの十字架 (1)

来はカウークによって支配される。(これらのナワールの基本的意味に関しては巻末付録を参照されたい。) これらの三つが中心となるナワールであるが、そのほかに二つの補助スピリットが存在する。右側のカンは追加のエネルギーを意味し、内なる火、大きな治癒力を意味する。左側のノッホは知性を意味し、人生がスピリチュアルなものであることを意味する。ここに存在するカバウイルはバッツーアカバル、バッツーカウーク、バッツーカン、バッツーノッホ、という対比関係である。

いずれにしても以上の様々な十字架にみられるのは明確な対構造、対照関係であり、そこにはカバウイルの原理が存在する。

6. マヤ民族文化におけるカバウイル

カバウイルの原理は、マヤの神話、カレンダー、十字架だけではなく、現代マヤ民族文化そのものの中にも色濃く残されている。そのいくつかを以下に述べてみよう。

はじめにアディビナシオンにおけるカバウイル

天の心 (Ukux Kaj)

空気の心 (Ukux Ik)

+

水の心 (Ukux Ja)

地の心 (Ukux Uleu)

5. マヤの十字架 (2)

アカバル (-8)



ノッホ (-14)



バッツ



カン (+14)



カウーク (+8)

6. マヤの十字架 (3)

について述べる。マヤのアッハキッヒ (シャーマン) はツイッテ^マの実、あるいはトウモロコシの粒を使って様々なアディビナシオンを行う。その時これらを必ず二つずつペアにして並べる。不思議に思った筆者はマヤ文化を知り始めた頃、あるアッハキッヒに、「何故二つなのか」と質問をしたことがある。アッハキッヒの答えは、「2は1よりも強い。2は完全数である。だから2でなければならない」というものであった。その後筆者はこの「2」の本来の意味を知ることになる。マヤ文化において、「2」という数は、それ自身が、マヤにおける最も重要な神的存在、天の心と地の心、テベウとククマツ、ツァコルとビトル、フン・フナブとヴブブ・フナブ、またフナブとイ

シュバランケを象徴しているのである。つまり2、一組のペアは神々のカバウイルなのである。マヤ文化において「2」は特別な数である。何故ならそこにマヤ文化の本質とも言えるスピリットとその親和力が宿っているからである。したがってカバウイルはまず数の次元で存在していることになる。

次にマヤ伝統文化に見られる、より本格的なカバウイルの例を挙げてみよう。

最初はマヤ文化の継承における教育的カバウイルの例である。グアテマラ、マヤ・キチュー地方のモモステナゴ文化には「赤い糸の儀式 (7 参照)」^{xiii}と呼ばれる伝統がある。新年に行われるこの儀式において、祖父母 (または父母) は、9本の赤い糸の端を自分たちの左手に結び、もう一方の端を子供たちの右足に結ぶ。この場合、組み合わせは、祖父 (または父) →女の子、祖母 (または母) →男の子、となる。また左手→右足となる。つまり交差するのである。9本の糸は女性の妊娠期間を象徴し、左手から右足への交差は、ママ (マヤの年の神) の交代、社会権力、権威の交代、世代交代を象徴している。赤い糸は、創造者たちの生命、力、エネルギーを象徴している。20日後、今度は糸の端が祖父母 (または父母) の右手に結ばれ、もう一方の端は子供たちの左足に結ばれる。つまり今度は右手→左足と交差する。この興味深い儀式の目的はマヤ文化の本質であるカバウイルの原理を世代から世代へと伝えることである。

次には夢文化におけるカバウイルが存在する。マヤ文化において夢は極めて重要な役割を持っている。夢はアディビナシオンの重要な方法であり、実際に多くのアッハキツヒは夢によって隠された真実を知る。モモステナゴ文化においては、夢は人間の魂を共鳴させる力を持つものである。したがって夫婦間、恋人同士の絆は、お互いを夢見ることによってより強いものになる。これを「夢の交換」と言う。人間存在における夢の重要性が際立っているのがチオルティ族の文化である。こ

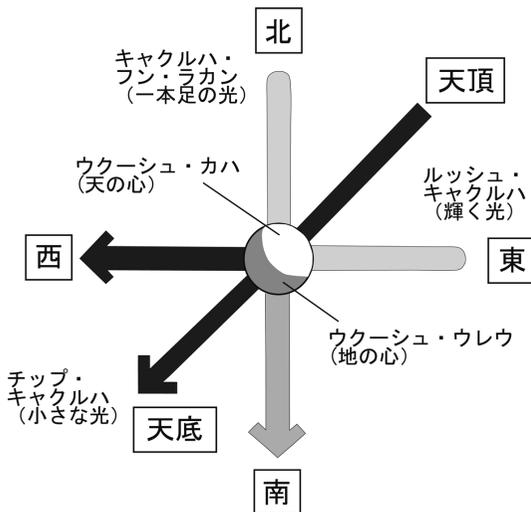


7. 赤い糸の儀式

Ri Mam. 1995. Momostenango, Guatemala: Kajib' Noj.の表紙

ここでは夢は未知の危険を知らせる兆候であり、予知的な機能を持つ。この文化においてはまた、夢の神アーワイニッシュ^{xiv}が存在する。この特異な神は両性具有神 (アンドロジャイノス) であり、その男性部分が夢を女性に、また女性部分が夢を男性に分配するという。この神はまた死の神チャメール (カメー) と結び付いていて、人々から恐れられている存在である。いずれにしても、アーワイニッシュは夢におけるカバウイルのよい例である。

最後に人間の魂の概念におけるカバウイルに触れよう。メキシコ、チアパス地方のマヤ・ツォツィル族の文化においては、この世に生を受けた人間は異なる二種類のスピリットを持っている。チューレル^{xv}とワイヘル (チャヌル、ナワールとも言う) である。チューレルは13個の部分から成るスピリットであるが、人間生命の魂とも呼べる重要な存在である。チューレルは人間の血の中に住むが、死とともに肉体を離れ、カティバックと呼ばれる冥界に行き、新たな生命の予備軍となる。一方のワイヘルは人間の中に住む、特定の動物のスピリットの片割れであり、宿主であ



8. 世界創造の十字架

る人間に大きな影響を与える。同様の対になったスピリットはキチュー族の文化にもみられる。キチュー地域の文化にはチャヘネルとハラハマックという対のスピリットが存在する。チャヘネルは身体の前半分に宿る。このスピリットは人間の持つ靈魂とでもいう存在であるが、眠りの間につまり夢として一身体を離脱することができる。そして死とともに肉体を去り、民族の魂が宿る場所に行き、そこに永久に留まる。一方のハラハマックは身体の後半分に宿る。このスピリットは個人の守護者であるが、たえず身体に留まり、個人の死とともに死ぬ。

これらはすべて人間精神のありかたに関する二元論であり、世界中の文化に存在するが、マヤにおいては特に顕著である。では何故二種類のスピリットが必要なのか。人間精神がこれらの異なるスピリットの協働関係なしには存立できないからである。つまり人間とは魂のカバウイルなのである。

7. マヤの世界観におけるカバウイル

以上でみるように、マヤ文化の伝統はカバウイルの思想で満ちているが、今度はより総合的な視点からこの思想を考察してみよう。

はじめにカバウイルはマヤにおける世界創造の象徴的存在である。マヤの世界創造は三つの光の交差によって行われた。^{xvi}(8参照) キヤクルハ・フン・ラカン、チップ・キヤクルハ、そしてルツシュ・キヤクルハである。これらはそれぞれ天空、水、そして太陽を象徴している。またこれは空の創造、つまり三次元世界の出現を意味するが、現代風に言い換えれば、マヤ宇宙論における「ビッグバン」概念であるとも言える。そしてあたかもその瞬間を待っていたかのごとく出現したのが空の神カバウイルである。したがってカバウイルは世界創造の象徴であり、その後のマヤの歴史が二元論的展開であることを予告するものである。

このビッグバンによって銀河の中心、オリオン座の位置に宇宙的十字架が誕生した。しかしその元々の起源は地上にあり、生命の樹(世界樹)と呼ばれたものである。しかしこの地上の樹はマヤ天文学の発達とともに、つまりマヤ文化の飛躍的進歩とともに天空へと持ち上げられ、マヤの宇宙を象徴する存在となった。天空におけるこの宇宙樹から時間が生まれ、その時間によって世界も、また生命も創造される。古代マヤ人がこうした結論に達した時、マヤの世界観が誕生したと言ってもよい。そしてその表象がマヤのカレンダーであり、その基幹を成す、20ナワールである。

別な視点からみると、マヤ世界を創造したのは天空の神、アハウ・テペウと大地母神、チュチュ・ククマツである。この両者の愛(結合)によって世界が創造された。これらの神は言うまでもなくカバウイルの関係にあるが、その正体は、突き詰めれば、前者は精神を象徴し、また後者は物質を象徴している。これは何を意味しているのか。マヤ二元論カバウイルの究極の原理である。

世界は精神と物質の結び付きによって創造される。また両者の分離によって破壊される。

このことはまたマヤの死生観によっても確かめることができる。マヤの死生観によれば、生命（生命の誕生）とは精神と物質の結合である。また死とはその分離である。精神と物質が結合したものが生命であり、分離された状態が死である。ではその後はどうなるのか。死んだ後物質は大地に帰り、生命の苗床としての滋養分となる。いっぽう精神はエネルギーとして時間の中に留まる。そして、正しい契機があれば、両者は再び結合し、新たな生命を生み出すのである。したがって精神と物質はカバウルの関係にあることになる。

カバウルの関係はまたマヤの文化的発展、維持においても存在する。創造されたマヤ世界はいかにして進歩したのか。『ポップ・ヴフ』にみられる概念をたどると、進歩はナワール（Nahual）とプス（Pus）の協力によって引き起こされたと思われる。前者は叡智、あるいは根源的エネルギーを意味する。他方プスとはキチエー語で「分けること」を意味する。つまり分割し、複雑化することである。世界、とりわけ生命は、物質世界の無限の複雑化の結果であるが、これはナワールがその叡智によってデザインし、出現を導いた創造物であるとも言える。そしてその背後にはマヤの最高神、アハウ・テペウの存在がある。進化したマヤ世界にやがて人間の文化が現われる。この文化はいかにして継続されるのか。ピソム・カカルとカニールによってである。^{xvii}ピソム・カカルは文化の精神的継続を象徴している。またカニールは文化の物質的継続を象徴している。現代風の表現に直せば、前者は文化遺伝子、後者は生物学遺伝子とでもいうことになる。

現代マヤ文化においてカバウルの関係を最もよく象徴しているのは、マヤの十字架とマヤ神聖暦であろう。アッハキツヒはマヤの儀式の中で小さな十字架の祭壇を作り、それを燃やす。その目的はマヤ世界の刷新であるが、その時天の心と地の心、アハウ・テペウとチュチュ・ククマツ、

そして20ナワールに祈る。この象徴的行為において、マヤの十字架は物質としてのマヤ世界を表し、また燃える火はマヤ神聖暦のスピリットを表している。すなわち前者は空間であり、後者は時間である。言い換えれば、マヤの十字架はククマツを、またマヤ神聖暦はテペウを象徴していることになる。したがってマヤ神聖暦とマヤの十字架はカバウルの思想がマヤ文化の二大要素として結晶したものである。

8. 人間存在とカバウルの関係

古代マヤ人は何故カバウルの思想を生み出したのか。またこの思想は、マヤ世界を超えて、人間の存在においていかなる普遍性を持っているのか。以上の各節で、マヤの歴史と文化にみられるカバウルの関係について説明を加えたが、今度はより視野を広げて、人間の存在とカバウルの関係について考察してみよう。

カバウルの関係はマヤ的な二元論である。それは異質な二者の相補的關係、協力的關係、協働を意味している。だがこれはいったい何を意味しているのか。

ここから先は筆者の推論であるが、マヤ人がカバウルの思想に到達したのは、まず、カバウルの関係が人間存在の基本条件であったからと思われる。マヤ人は20進法を考案した。また20ナワールの思想を生み出した。すでに述べたようにこの20は人間の身体的特徴、手足の指の合計が20であることに起因する。これと同様に、カバウルの思想もまた人間の身体の動きの顕著な特徴に基づいていた可能性がある。

人間は二本の手を持ち、また二本の足を持っている。また二個の目、耳、その他を持っている。人間の身体はシンメトリカル（左右対称）にデザインされている。しかもこのシンメトリーはただ単に美学的な飾りではない。一致協力して特定の機能を果たすのである。例えば、人間は二本の手で作業を行い、二本の足で歩き、また走り、また

二個の目で見、二個の耳で聴く、というように。そしてこれらのペアの器官は左右の役割が微妙に異なっているのだ。目的によってどちらかが優勢になり、他方はそれを補完する。この身体的特徴は目に見えない内臓においても存在する。肺や腎臓など多くの臓器が対になって存在する。極めつけの身体的カバウルの例は脳であろう。周知のように人間は機能が異なる二つの脳、言語脳と音楽脳、を持ち、脳梁を通して協働している。さらにはまた神経システムにおいても、例えば末梢神経系には、体性神経系（随意）、自律神経系（不随意）の二種類が存在する。古代マヤ人がこれらの身体器官とその機能に関してどこまでの知識を持っていたのかは不明である。しかし彼らが優れた自然の観察者であったことを考えると、人体の持つこうした対構造、相補的協働の原理を基本的な意味で理解していたと思われる。何故ならカバウルの例は、その出発点として、彼らの人体の働きを理解に基づいていると思われるからである。

カバウルの傾向は別に人体だけに限らない。人間の生と死、行動、心理、人間関係、さらにはまた文化と社会においても存在する。中でも最も顕著なのはやはり生と死であろう。この世に生まれた人間は、時期が来るとやがて死ぬ。人間の生は死の認識によって有意味となる。同様に死もまた生によって有意味となる。つまり両者はカバウルの関係にある。人間の文化はその相互作用の結果である。いっぽう人間の生を動かしている最大の力は「性」の原理である。また性に基づいた親和力である「愛」である。セックス、恋愛関係、夫婦愛、また家族愛、親子の愛等はその代表的なカバウルであろう。だがカバウルは別に性的なものに限られてはいない。師弟関係、友情、パートナーシップ等の人間関係においてもやはり存在する。また文化的・社会的次元においては、無数のカバウルをみつけることができる。善と悪、苦と楽、幸福と不幸、仕事と遊び、勝ちと負け、戦争と平和、健康と病気、裕福と貧乏、聖と俗、叡智と暗愚、等である。こうした対概念を眺

めていると、人間が文化と社会を構築した基本構造がカバウルであるようにも思う。

カバウルはまた自然現象の中にも存在する。人間の住む世界から見ると、上には天空があり、下には大地がある。あるいは天界があり、冥界がある。一日には昼があり、また夜がある。太陽が昇る方向があり、また沈む方向がある。また暑い季節があり、寒い季節がある。雨季があり、乾季がある。

こうしたものは言語の語彙としても存在する。何故なら言語とは人間が創り上げた世界の表象の体系であるからだ。すべての言語の語彙にみる対概念、対照概念、二元論的性格は疑うことが出来ないものである。同様のことはまた、文化の規範、慣習、法、宗教等としても存在する。

以上で理解されるように、カバウルは人間存在の根本において存在している原理であるということが出来よう。古代マヤ人はおそらくこうした人間とそれを取り巻く自然の中からカバウルの思想を構築したと思われる。

9. マヤ民族と調和の希求

現代マヤ民族文化には一つの顕著な傾向が存在する。それはこの文化の持つ理想主義的傾向である。そしてその理想主義を表す一つのキーワードが「調和」である。グアテマラ・マヤのアツハキツヒは数多くの儀式を行うが、必ず儀式の中で調和を祈念する。調和の祈念だけの儀式もある。調和の実現をグアテマラ・マヤの二大神、アハウ・テベウ、チュチュ・クックマツツに祈る。また時間の神々、20 ナワールに祈る。それも個人や家庭、社会、国家の調和の実現だけではなく、自然界の調和、人間と大地の調和、宇宙の調和、はては人間と動物、人間と植物の調和の実現すら祈るのである。筆者は、マヤ文化を知り始めた頃は、こうしたマヤ人の言う調和の意味がよくわからなかった。理念としての調和は理解しても、彼らが何故それほどこの理念にこだわるのか理解

できなかった。さらに言ってしまうと、調和というものが、あまりにも安易な標語、見え透いた嘘のように思えたのである。筆者がそう思ったのは、自分の人生体験、そして歴史的事実から来る正直な感想であったが、実際には筆者の無知と思い上がりにすぎなかった。平和で何の危険もない社会に住み、調和という言葉に飽き飽きしている一人の日本人の感想にすぎなかった。マヤ人が「調和」と言う時、彼らはそれを本気で意味している。そう思うようになったのはマヤ人とマヤ文化をよりよく知るようになってからである。

マヤ人にとって調和は極めて重要な社会理念である。その理由はただ一つである。調和の実現がマヤ民族の全歴史を通して最も切実な課題であったからである。その背後には血塗られた古代マヤの歴史が存在する。マヤ神話『ポップ・ヴフ』が雄弁に物語るように、古代マヤ文明はマヤ原始社会の独裁者ヴクブ・カキッシュ^{xviii}、暗黒帝国シバルバーとの長い闘いの結果成立したものである。マヤ民族はその時知性と人間性による開明的な文化を構築した。しかしその後の歴史は平坦ではなく、幾多の困難に直面し、最後には古典期マヤの崩壊という大破局（カタストロフィー）を経験する。そして最後に訪れたのがスペイン人による征服である。マヤ民族はこれらの危機を不死鳥のように乗り越えて現代まで存続しているが、その歩みは試練そのものであった。そしてその試練は二十世紀後半に入ってからでも続くのである。

ここで少しグアテマラの悲惨な現代史に触れてみよう。^{xix}1954年にハコボ・アルベンス・グスマン^{xx}大統領による民主的政権がCIAによる軍事クーデターにより転覆し、アルベンスは失脚する。その後カルロス・カスティージョ・アルマスが大統領になり、以後35年以上にわたる軍事政権の時代が始まる。この時代はシバルバーの精神が現代に復活した暗黒時代であった。1961年に、ゲリラ組織である武装反乱軍（FAR）が発足し、本格的な内戦が始まる。これはアメリカとソ連の代理戦争でもあった。アメリカの支援を受

けた政府は反乱軍だけではなく、その協力者、心情的協力者を容赦なく捕えて殺害した。グアテマラの人口の大半はマヤ人である。したがってこれは事実上のマヤ民族の根絶やし作戦であった。この恐怖政治の犠牲になったマヤ人は20万人以上に上ると言われる。軍事政府はマヤ民族の知識人、リーダー、教師、ジャーナリスト等を初めとして、多くのマヤ人を誘拐し、拷問して殺害して、その遺体をひそかに埋葬した。その中心となったのが、特殊部隊カイビル^{xxi}である。多くの人々の遺体は現在でも所在不明のままである。時にはマヤの村全体が焼き払われ、その住民が無差別に虐殺された。またそうしたマヤ人を保護しようとするカトリックの神父までもが殺害された。ようやく1996年になって、グアテマラ政府とグアテマラ民族革命連合（URNG）との間で「和平合意（Acuerdo de Paz）」が成立し、長い内戦は一応の終結をみた。しかしこの間にマヤ民族が蒙った人的被害、また文化的損失は計り知れないものであった。

したがって現代のマヤ人が「調和」について語る時、我々をはじめにこの悲劇の重さを理解しなければならない。ちょうど第二次世界大戦の悲惨を体験した日本人にとって、戦後において「平和」という言葉がキーワードとなったように、現代マヤ民族にとっても「調和」はかけがえのない言葉なのである。調和の希求は数千年にわたるマヤの歴史を貫くキーワードである。

10. 調和の思想とカバウシル

マヤの調和の思想の理論的根拠とは何か。マヤ二元論カバウシルである。言い換えれば、カバウシルの結果として調和が実現される。何故そうなるのか。カバウシルが異質な二者の必然的、協力的、生産的な関係であるからである。すなわち調和的な関係であるからである。いかなる優れた能力、力、エネルギーも実践における調和なくしては創造的な結果を生むことはない。したがって

調和はマヤ二元論に内在する属性なのである。だがこれは具体的にどのような意味を持っているのか。それについてより踏み込んで考察してみたい。

ナワールは現代グアテマラ・マヤ文化において神のような存在であるが、アッハキツヒと話すとき、誰しもが口をそろえて、ナワールはエネルギーであると言う。アッハキツヒはそのエネルギーを使用して様々な仕事をするのである。だがこのエネルギーには二種類あり、肯定的エネルギーと否定的エネルギーが存在する。そして最も重要なことはそのバランスをとることであると言う。これはどういう意味なのか。一言でいえば、肯定的エネルギーと否定的エネルギーがカバウルの関係にあるということである。わかりやすく、人間を例にとってみよう。マヤ的な理解では、人間は生まれつき肯定的エネルギーと否定的エネルギーを同時に保有している。人間の生命としての活動は両者の協働作業なのである。だがこの協働がたえずうまく行くとはいかぎらない。時おり肯定的エネルギーが否定的エネルギーを上回ることがある。その時人間は生命力の横溢をみるが、同時にその力を制御することが出来ない。そのための過剰から来る病気があり、また他者への理解、倫理を忘れた人間となる。反対に往々にして否定的エネルギーが勝る時がある。すると今度は生命力が減退し、その弱さ、欠落から様々な支障をきたす。多くの病気はこの負のエネルギーに起因するものであり、否定から来る悩み、ストレス、障害、また精神の崩壊も同じ原因である。そこで、人間として生きてゆく上で、これらのエネルギーの間でバランスをとることが重要になる。マヤ人が調和の重要性を説くのは、その背景に、こうした人間存在の理解があるからである。したがってマヤ人の言う「調和」とは、ただ単なる「調和（ハーモニー）」と言うよりは、むしろ「均衡（バランス）」という意味に理解すべきであろう。^{xxii}

以上は人間の例であるが、現代マヤ文化における調和、あるいは均衡の原理は、人間の世界に限らず、世界のすべての領域に適用される。一般に

五つの調和が課題として存在すると言われる。すなわち

- (1) 個人における調和
- (2) 家族における調和
- (3) 社会における調和
- (4) 自然における調和
- (5) 宇宙における調和

説明を要しないと思うが、マヤ人はこれらが実現された時真の調和ある世界が実現すると考えている。人間世界における調和の実現は当然の発想であるが、それだけでなく、自然、そして宇宙にまで視野が広がられているところに彼らの調和概念の特徴がある。したがってアッハキツヒが人間だけではなく、動物や植物の調和をも祈るのは必然的な結果である。彼らは遠い古代において、自然における存在のすべてが循環と均衡の原理によって成り立っていることを知った。またそれが最高神、アハウ・テペウ、チュチュ・ククマツツの意思であることを悟った。人間の住む大地、自然、地球、そして無限の宇宙は生きている存在であり、バランスをとりつつ変化する以外には存続することが不可能なのである。

11. マヤの宇宙観

以上、マヤ民族文化における調和の重要性を理解した後で、再度カバウルの思想を考察してみよう。マヤ二元論カバウールとはいったい何なのか。根本的にどういう思想なのか。それは一種の弁証法なのか。

カバウールはある意味で西欧哲学の弁証法^{xxiii}に似ているとも言える。ドイツの哲学者G.W.F.ヘーゲルが提言したこの哲学思想は、正、反、合という思想の発展を述べたものである。全てのテーゼ（命題＝正）はその中に必然的な矛盾をはらみ、矛盾はやがてアンチテーゼ（反対命題＝反）となって両者の間に対立関係が生まれ

る。しかしそこで留まるのではなく、やがてその矛盾は克服され、そこからより高いジンテーゼ（統合命題=合）が生まれる。この過程で起きる画期的な進歩、それが止揚（Aufheben）である。Aufhebenには二つの意味があり、一つは棄てること、もう一つは高めることである。

ここで言う「止揚」とは、マヤ的な発想からすると、「創造」ということであろう。あるいは「刷新」ということであろう。その意味ではカバウイルは西欧的な弁証法に似ている。だが決定的に異なる点もある。それは西欧の弁証法が異質なものの対立と闘争を辞さない関係であるのに対し、マヤの二元論カバウイルはあくまで両者の調和的な結び付きを前提としているのである。そこに存在するのはあくまで相補性に根差した協力的な関係であり、だからこそ協力する二者は異質な存在である必要があるのである。そしてこの関係が目指す究極の目的は世界の調和ということである。

したがって、あくまで西欧的「弁証法」にこだわった表現をすれば、カバウイルは「調和の弁証法」とでも呼ぶべき二元論である。

カバウイルの思想は現代マヤ文化においては、一般に、マヤの宇宙観（La Cosmovisión Maya）と呼ばれる。^{xxiv} この場合、「宇宙観」とは、実際には、「世界観」、「文化」という程の意味である。おそらくマヤ人の宇宙についての情熱と知識からこうした用語が定着したものであろう。ただし現代マヤ世界における「マヤの宇宙観」は、宇宙と自然における人間の調和と共生を目指した、非常にスピリチュアルな傾向を持つものである。だがそれはニューエイジ的な抽象的なものではなく、生活に直結した極めて具体的な指針である。はっきり言えば「よく生きる（Uztilaj K'aslemal）」ための叢智を語ったものである。この叢智は、肉声として、現代マヤ人の社会生活、精神生活の中にも見出される。例えば、祖父、祖母は小さな子供たちにこう教える。^{xxv}

トウモロコシを収穫しなさい。
若葉を燃やしてならない。
昆虫を殺してはならない。
頭を覆いなさい。

マヤの宇宙観の内容とは何か。何をすべきなのか。

筆者が出会ったサンティアゴ・アティトランのアッハキッヒ、ニコラス・ツイナー・レアンダ^{xxvi}はこう答えた。

マヤの宇宙観は、平和、尊敬、教育、母なる大地、母なる自然（太陽、月、星、空気、川等）、男性、女性、聖なる食べ物を共有すること、種蒔きの祈願、豊作の祈願、非暴力、嘘をつかない、化学物質を使わない、マヤの祈り、等を意味します。

マヤの宇宙観が抽象的な理想ではなく、人間の社会生活と密接に結び付いた課題と実践であることがわかる。そこには紛れもない自然への尊敬と畏怖が感じられる。その背後にあるのはマヤ宗教の最高神アハウ・テペウの意思なのである。

しかしマヤの宇宙観は同時にまた純朴な理想主義でもない。ましてや宇宙と生命の讃歌ではさらさらない。それは現代マヤ民族の複雑な社会的経緯と苦難を物語るあまりに人間的な苦悩の意思表示でもある。マヤ・キチエーの桂冠詩人、ウンベルト・アカバル^{xxvii}の一連の詩はそのことを雄弁に歌っている。現代グアテマラにおいてマヤ人であることは何を意味するのか。彼はキチエー語を話す生粋のマヤ人であるが、同時にまたスペイン語を話すグアテマラ人、そして何よりも一人の人間である。しかし詩人として世に出る決心をし、世界市民を目指したウンベルトを待っていたものは厳しい現実と自らのルーツを確かめる新しい発見であった。彼は現代に生きるマヤ人としてマヤ民族の悲劇をつぶさに見た。この苦く苛烈な体験は彼を詩人として依って立つ精神の原風景に導く

ことになったと思われる。彼が詩作において表現しようとしたもの、それは現代マヤを通して見た古代人の宗教的衝動の再創造であった。

そして誰も我々を理解しない^{xxviii}

我々の血の炎は燃える
消せない
何世紀もの風雪にもかかわらず
沈黙した息詰まるような歌
魂の悲惨
追い詰められた悲しみ
ああ、私は泣き叫びたい！
……

ウンベルト・アカバル『滝の守人』より

マヤの宇宙観はマヤ人の社会理念と経験が反映された民族の知恵である。^{xxix}それはマヤ文明の創成期において成立し、その後歴史の変容を重ねながら現在に至っている。初期マヤの宇宙観がどのようなものであったのかは不明である。だが神話の物語を読む限り、その本質は現在と同じであったと思われる。そしてその内容から理解できるのは、マヤ文明の歴史が太古の時代から苦難に富むものであり、現代マヤ文化はその栄光と悲惨、天国と地獄の歴史体験を経たものであることである。言い換えれば、それは古代マヤ人が歴史から学んだ理想社会の理念であり、現代マヤ民族にその存在理由と希望の未来を与え続けている思想である。

12. 現代世界とカバウシル

最後に現代世界におけるカバウシルの意義について考察したい。この概念は、マヤ文化を超えて、現代世界においても意味のある概念なのか。意味のある概念であると考え。研究休暇でグアテマラに滞在していた1998年11月、筆者はケツァル

テナンゴで開かれたマヤの民間団体が主催するマヤ文化の連続フォーラム^{xxx}に参加した。テーマは環境問題であり、筆者は集まった人々を前に日本の環境問題の話をした。しかし聴衆の質問は環境問題などではなく、1945年に広島と長崎に落とされた原爆に集中した。不意を突かれた筆者は言葉に窮し、満足な返答ができなかったのを覚えている。

原爆は現代世界の顕著な特徴、科学と技術の進歩を象徴している。それは疑いもなく人間の知性と努力の結晶である。だがそれは人間性の勝利ではない。敗北である。何故ならそれはカバウシルの破壊であるからである。マヤ人は古代から優れた科学者であり技術者であった。だがその結果同時にまた破壊と滅亡、歴史の悲劇を何度となく経験しなければならなかった。日本人である筆者に対するマヤ人の質問は、そうした彼らの歴史と問題意識に基づくものであろう。原爆の発明は悪夢の始まりに過ぎなかった。その後、水爆、中性子爆弾等、恐るべき大量破壊兵器が開発され、東西の冷戦において危機一髪が続いた。さいわい人間はぎりぎりのところで踏みとどまり、核戦争によるカタストロフィー（大破局）には至らなかった。だがそれで人間性が改善されたわけではない。その後も局地的な紛争において進歩した武器が容赦なく使われ、現在でも無数の殺戮が繰り返されている。

一方、科学技術の進歩は我々に数限りない便宜を与えてくれた。車、バス、電車（地下鉄）、列車、飛行機等の交通機関は人間の移動のスピードに根本的な変化をもたらした。またコンピュータ、インターネット、ケイタイ、スマートフォンの発明は人間のコミュニケーション手段を革命的に変えた。いまや我々は世界のどこにしようとも、簡単に誰とでもリアルタイムで交信できるのである。科学技術の進歩は我々の日常生活を便利なものにし、社会生活を快適なものにしている。我々の住むこの世界は豊かな社会である。

だがこの世界は決して理想社会ではない。何

故ならそこには無数とも言える問題、不均衡、破綻があるからだ。これらの問題を人間の文化史という視点から見ると、とりわけ重大であると思われるのは、現在世界中で進行しているグローバリゼーション（世界標準化）と伝統文化（及び言語）の衰退と消滅、またその結果起きつつある精神の貧困ではないだろうか。世界中の小規模の伝統文化が近代化のため消滅しつつある。日本においても伝統文化は急速に忘れられつつある。その理由は簡単で、社会生活上もはや必要ではないからである。進んだ技術はそれよりはるかに便利で快適なものを与えてくれる。現代において技術は「神」のような存在である。だがこの圧倒的な変化の過程で、精神の退化が起きていることも忘れてはならない。精神の退化は同時に人間性の退化を意味する。それは疑いもなくカバウルの破壊への道程である。

マヤの思想カバウルが現代世界においても意味を持っているのは、以上のような理由からである。現代世界は確実にカバウルとは逆行する道を歩んでいる。カバウルは均衡の原理の上に成立した叡智である。マヤ文明は精神と物質のカバウルにより成立し、カバウルの破綻によって滅亡した。我々はこのことを歴史の教訓とすべきであろう。

注

- i 通称『*Popol Vuh*、ポポル・ヴフ』、正確には『*Pop Wuj*、ポップ・ヴフ』と呼ぶべきこの草稿はマヤ・キチュー族に伝わるマヤ神話である。Pop Wujとは「時間の書」という意味である。18世紀初頭にグアテマラ、チチカステナンゴの聖トマス教会において、フランシスコ会修道士、フランシスコ・ヒメネス（Francisco Ximénez）によって発見された。第一部、第二部に分かれ、前半では双子の英雄、フナプとイシュバランケによるマヤ文明の建設、後半ではマヤ・キチュー族の起源と歴史が描かれている。
- ii Álvarez Juárez, Victoriano, et al. 1997. *Fundamentos de la Cultura Maya-K'iche: Interpretación y Estudio Científico del Libro Sagrado Pop Wuj Realizado por los Sacerdotes Mayas de Guatemala*. Quetzaltenango, Guatemala: La Asociación de los Sacerdotes Mayas de Guatemala. を参照。
- iii *Pop Wuj: Libro de Acontecimientos*. 1979. Traducción directa del manuscrito del padre Jiménez por Adrián Inéz Chávez. D.F., México: Centro de Investigaciones Superiores del INAH, Ediciones de La Casa Chata. p.2.
- iv 上掲書 p.2a.
- v Cook, Garrett G. 2000. *Renewing the Maya World: Expressive Culture in a Highland Town*. Austin, Texas: University of Texas Press. pp.195-202. を参照。
- vi Xibalbáは神話『ポップ・ヴフ』に登場するマヤの冥界である。その住民はアッハカマー（Aj Kamé）と呼ばれる。死の人々という意味である。だが死者の世界であるこの世界は地上とよく似た社会構成を持ち、おそらくは古代に存在した暴政社会がモデルになっていると思われる。二人の大王が存在し、殺戮と生贄による恐怖政治によって統治していた。マヤ文明はこの暗愚の社会を征服することで成立する。
- vii 古代マヤ人は多くのカレンダーを作成したが、中でも長期計算法（5125年周期）、太陽暦（365日周期）、神聖暦（260日周期）は最も重要なものである。とりわけ神聖暦はマヤ時間思想の根源を成していて、マヤ文化及び社会を導く指針として機能してきた。神聖暦はマヤ・キチュー語でSol Ki'jまたはChol Ki'jと言う。ユカテク語ではZolkinと言う。
- viii マヤ神聖暦においては日のスピリットである20個のナワールが日々交代して世界を統括する。一ヶ月は20日であり、それが13サイクルして、260日で神聖暦の一年が終わる。それぞれのナワールは複雑な意味を持っているが、要約すると付録の表のようになる。
- ix Stross, Brian. 1983. *Oppositional Pairing in Meso-*

- merican Divinatory Day Names. *Anthropological Linguistics*, 25(2): 211-273. を参照。ストロースの指摘は興味深い、この内部構造については必ずしもすべてのマヤの伝統で確かめられているわけではない。
- x マヤの十字架はマヤ文化において独自に発達した思想的シンボルである。むしろキリスト教の十字架とは何の関係もない。マヤの十字架は空間としての世界、つまり宇宙、物質を象徴している。この十字架の起源は生命の樹（世界樹）、天空、そして人間である。
- xi グアテマラにおいてはマヤのシャーマンは Aj K'ij と呼ばれる。キチェー語で「日を守る（管理する）人」、「光の人」という意味である。ユカテク語では Ah Kin（アーキン）と言う。
- xii Tzitte は古代マヤの聖木であったピト（Pito）の木の実である。この赤い実はアルカロイド系の毒を持ち、幻覚作用があると言われる。現代グアテマラ・マヤのアッハキッヒ（シャーマン）は 260 個のツイッテの実を使ってアディピナシオン（神託）を行う。
- xiii *Ri Mam*. 1995. Momostenango, Guatemala: Kajib' Noj. 参照。モモステナゴにおけるこの新年の儀式は世代から世代へのマヤ文化及びマヤの叡智の継承を表している。だがこの伝統も近年においては次第に忘れられつつあるという。
- xiv Ah-waynix はチオルティ文化独特の夢の神である。この文化においては、眠りは死に限りなく近い状態であると考えられている。いったん眠りに就けば翌朝再び目覚めるという保障はない。この両性具有神は死のナワール、チャメル（Chamer、キチェー語の「カマー」）と関連し、人々の生死、人生に大きな影響力を持っている。またある種の夢は未来を予知するものと考えられていて、人々は朝起きると夜に見た夢について語り合うという。
- xv Chu'lel はマヤ独特の概念である。古代マヤ人は人間の血の中に根源的なスピリットが存在すると考えた。血は聖なるものであり、古代マヤ文明において放血、生贄等の宗教祭儀が行われた。これらはもちろん現代では存在しないが、血を神秘的な存在とみなす文化伝統は各地に残っている。
- xvi Kyakulja Junrakan, Chip Kyakulja, Rsh Kyakulja. *Pop Wuj: Libro de Acontecimientos*. 1979. Traducción directa del manuscrito del padre Jiménez por Adrián Inés Chávez. D.F., México: Centro de Investigaciones Superiores del INAH, Ediciones de La Casa Chata. pp.3-3a. を参照。
- xvii Pizom Q'aqal は神話『ポップ・ヴフ』の中で、最初のキチェー人である四人のバラムが死出の旅に出る時、子供たちに与えた魔法の箱である。その中身は叡智であり、現在のマヤ文化ではツイッテという神具として残されている。K'anil は 20 ナワールの一つで、ミルパ（トウモロコシ畑）を表し、種まき、食料、創造性を意味する。ピソム・カカルは人間文化の継承を、カニールは自然的存在としての人間の継承を表している。
- xviii Wukub Caquix キチェー語で「七つのコンゴウインコ」という意味である。神話『ポップ・ヴフ』では最も古い時代の独裁者として描かれている。その本質は「火の鳥」、つまり太陽の化身で、おそらくはマヤ初期の太陽神であったと思われる。名称は異なるが、マヤ各地において類似の神々が存在した。
- xix グアテマラ現代史、マヤ民族の受難に関しては多くの書籍が存在する。ここでは以下のものを挙げておく。
近藤敦子 1996 年 『グアテマラ現代史：苦悩するマヤの国』 彩流社
Carmack, Robert M.(ed.). 1988. *Harvest of Violence: The Maya Indians and the Guatemalan Crisis*. Norman and London: University of Oklahoma Press.
Perera, Victor. 1993. *Unfinished Conquest: The Guatemalan Tragedy*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- xx Jacobo Árbenz Guzmán (1913-1971). 1951-1954 年グアテマラ大統領。任期中に当時グアテマラを支配していたアメリカ系巨大企業、UFCO（ユナ

イテッド・フルーツ・カンパニー)の土地を接収するなど思い切った民主化政策を実施した。民衆の人望が厚かったが、アメリカ(CIA)によるクーデターのため失脚し、メキシコに亡命した。

xxi Kaibiles グアテマラ内戦で活躍したグアテマラ軍事政府のエリート特殊部隊。ジャングルでの戦闘、拷問、殺人のプロ集団であり、悪名高い存在であった。

xxii 日本語の「調和」の概念はかなり「あいまい」である。あるいはその「あいまいさ」が日本的な「調和」であるとも言える。すなわち調和の本質は「和」にあり、これは複数の異質な存在が混在する状況で、お互いに独自性を棄てて融合し、対立しないことを意味する。対照的にマヤ的な調和(Armonía)の本質は均衡(Equilibrio)にある。すべてを異質な二者の相互作用ととらえ、そこに働く肯定と否定のエネルギーの均衡を実現しようとするものである。ここでは、変化の過程においても、異質な存在の独自性は棄てられない。その意味で徹底した二元論である。

xxiii ドイツ観念論哲学の完成者と呼ばれる Georg Wilhelm Friedrich Hegel (1770-1831)の方法論は一般に弁証法(Dialektik)と呼ばれるが、ヘーゲルはこの過程が実際の歴史の中に存在していると信じた。キリスト教的世界観に従って人間の社会と歴史を序列化して再構築し、西欧世界の優位性を確立した。弁証法的な発想はヘーゲルだけではなく、当時の多くの思想家に共通した考えであったが、西欧中心主義による一種の進化論であったとも言える。

xxiv La Cosmovisión Mayaはスペイン語であるが、この用語のマヤ語による定まった表現はない。そのままマヤ語化してLa Cosmovisión Mayab'と言うか、あるいはRaxalaj Mayab' K'aslemalil(マヤ・グリーン・ライフ)などという言い方もある。ビクトリアーノはより哲学的に解釈して、Le Chikaj Mayib'(マヤの宇宙)という表現を使っている。

xxv Lidia Matzir Miculax, Marta et al. 2009. *Cosmovisión Mayab': Dos Tres palabras sobre sus*

principios. Reconstitución del Ser Mayab'. Serie Oxlajuj B'aqtun: Año Maya 5125(Mayo 2009). B'oko'(Chimaltenango), Guatemala: Asociación Maya Uk'ux B'e. P.13.原文は

Chasik'a'la ixim.

Mak'at rax taq q'ayes.

Makamisaj taq chikop.

Ch'uq'u la jolom.

xxvi Nicolas Tziná Reanda ニコラスはまだ30代前半の若いアツハキツヒである。サンティアゴ・アティトランのアツハキツヒにはおどろおどろしい、呪術的な人物が多いが、ニコラスは言語明瞭な、極めて理知的な人であった。

xxvii Humberto Ak'abal (1952-) マヤ・キチエー族の詩人。グアテマラ、モモステナンゴに生まれる。キチエー語とスペイン語による一連の詩はマヤの精神的伝統と現代における民族の苦悩を歌ったもので、簡潔な詩風の中に深い思索が込められ、そのため「魂の詩人」とも呼ばれる。1993年刊行の詩集*Guardián de la caída de agua*(『滝の守人』)がグアテマラのEl Libro del Año(今年の一冊)に選ばれ、その名が広く知られることになった。彼の詩は、現在では、ドイツ語を初めとして多くの言語に翻訳されている。

xxviii Ak'abal, Humberto. 2000. *Guardián de la caída de agua*. Segunda edición. Guatemala, Guatemala, C.A.: Librerías Artemis-Edinter, S.A. P.127. 原文は

Y nadie nos ve

La llama de nuestra sangre arde,

inapagable

a pesar del viento de los siglos.

Callados,

canto ahogado,

miseria con alma,

tristeza acorralada.

¡Ay, quiero llorar a gritos!

.....

xxix マヤの宇宙観については多くの著作、マニュアル、パンフレットが存在する。マヤ人による実践的なマニュアル、あるいは社会的提言として以下のものを挙げる。

Raxalaj Mayab' K'aslemalil=Cosmovisión Maya, plenitud de la vida. 2006. Guatemala, C.A.: Programa de las Naciones Unidas para el Desarrollo, Guatemala(PNUD).

Ordóñez Cifuentes, José. 2008. Restitución de la armonía cósmica: Propuesta jurídica de los pueblos originales de Abya Yala. *Revista de la Facultad de Derecho de México*, 250: 245-302.

Lidia Matzir Miculax, Marta et al. 2009. *Cosmovisión Mayab': Dos Tres palabras sobre sus principios.* Reconstitución del Ser Mayab'. Serie Oxlajuj B'aqtun: Año Maya 5125(Mayo 2009). B'oko'(Chimaltenango), Guatemala: Asociación Maya Uk'ux B'e.

また研究書としては次のものがある。

González Martín, Juan de Dios. 2001. *La Cosmovisión Indígena Guatemalteca, Ayer y Hoy.* Estudios Sociales No.65. Guatemala: Instituto de Investigaciones Económicas y Sociales, Universidad Rafael Landívar.

xxx La Cosmovisión Maya Frente a La Crisis Actual (現実の危機を前にしてのマヤの宇宙観). 13回に及ぶこの連続フォーラムは当時筆者が所属していたIMAGUAC (Instituto Maya Guatemalteco de Ciencia) によって1998~1999年にかけて開催された。当時高まりつつあったマヤ民族文化復興運動の機運をよく表していて、場所こそケツアルテナンゴというグアテマラの一地方都市であったが、その意図はマヤ文明の思想的遺産である「マヤの宇宙観」がいかに現代世界の危機を救えるかという積極的なものであった。

参考文献

Ajxup Pelicó, Virginia et al.(Elaboradores). 2004. *Concepción Maya del Tiempo y Sus Ciclos.* Momostenango, Guatemala: Consejo Maya "Jun Ajpu' Ixb'alamke."

Ajxup Pelicó, Virginia y Juan Zopil(Elaboradores). 2009. *Propuesta de Armonía y Equilibrio entre Mujeres y Hombres desde La Cosmovisión Maya.* Guatemala, Guatemala, C.A.: Asociación Pop No'j.

Ak'abal, Humberto. 2000. *Guardián de la caída de agua.* Segunda edición. Guatemala, Guatemala, C.A.: Librerías Artemis-Edinter, S.A.

Álvarez Juárez, Victoriano, et al. 1997. *Fundamentos de la Cultura Maya-K'iche: Interpretación y Estudio Científico del Libro Sagrado Pop Wuj Realizado por los Sacerdotes Mayas de Guatemala.* Quetzaltenango, Guatemala: La Asociación de los Sacerdotes Mayas de Guatemala.

Álvarez Juárez, Victoriano. 1999. La Espiritualidad Maya y La Libertad de Culto. En *Memorias del II Congreso Internacional sobre el Pop Wuj realizado en Mayo-Junio de 1999*, pp.47-56. Xe Lajuj No'j (Quetzaltenango), Guatemala: Centro de Estudios Mayas TIMACH.

Cabrera, Edgar. 2003. El Kabawil como Plataforma Científica de la Nueva Nación. En *Memorias del III Congreso Internacional sobre el Pop Wuj realizado en Agosto de 2003*, pp.21-28. Xe Lajuj No'j (Quetzaltenango), Guatemala: Centro de Estudios Mayas TIMACH.

Calendario Guatemala Maya 2012. 2012. Chichicastenango, Guatemala: Fundación Centro Cultural y Asistencia Maya C.C.A.M.

Carmack, Robert M.(ed.). 1988. *Harvest of Violence: The Maya Indians and the Guatemalan Crisis.* Norman and London: University of Oklahoma Press.

Cholb'al Q'ij 2012(Agenda Maya 2012). 2012. Guatemala, Guatemala: Nim Q'atb'al Tzij Kech Ajq'ijab'

- OXLAJÚJ AJPOP.
- Cook, Garrett G. 2000. *Renewing the Maya World: Expressive Culture in a Highland Town*. Austin, Texas: University of Texas Press.
- Freidel, David, Linda Schele, and Joy Parker. 1993. *Maya Cosmos: Three Thousand Years on the Shaman's Path*. New York, New York: William Morrow and Company, Inc.
- Girard, Rafael. 1962. *Los Mayas Eternos*. D.F., México: Libro Mex*Editores.
- González Martín, Juan de Dios. 2001. *La Cosmovisión Indígena Guatemalteca, Ayer y Hoy*. Estudios Sociales No.65. Guatemala: Instituto de Investigaciones Económicas y Sociales, Universidad Rafael Landívar.
- Himelblau, Jack. 1989. The Popol Vuh of the Quiche Maya of Guatemala: Text, Copyist, and Time Frame of Transcription. *Hispania*, 72(1): 97-122.
- 近藤敦子 1996年 『グアテマラ現代史：苦悩するマヤの国』 彩流社
- Lidia Matzir Miculax, Marta et al. 2009. *Cosmovisión Mayab': Dos Tres palabras sobre sus principios*. Reconstitución del Ser Mayab'. Serie Oxlajuj B'aqtun: Año Maya 5125(Mayo 2009). B'oko' (Chimaltenango), Guatemala: Asociación Maya Uk'ux B'e.
- López García, Julián y Brent E. Metz. 2002. *Primero Dios: Etnografía y cambio social entre los mayas ch'orti's del oriente de Guatemala*. Guatemala: Magna Terra editores, S.A.
- Ordóñez Cifuentes, José. 2008. Restitución de la armonía cósmica: Propuesta jurídica de los pueblos originales de Abya Yala. *Revista de la Facultad de Derecho de México*, 250: 245-302.
- Perera, Victor. 1993. *Unfinished Conquest: The Guatemalan Tragedy*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Popol-Vuh: Las Antiguas Historias del Quiché*. 1995(original edición en 1947). Séptima reimpre-
- sión. Versión, introducción y notas de Adrián Recinos. Guatemala, Guatemala: Editorial Piedra Santa Guatemala. (邦訳：A・レシーノス原訳・校注 林屋永吉訳一九七七年『ポポル・ヴフ』中公文庫)
- Popol Vuh: The Mythic Sections-Tales of First Beginnings from the Ancient K'iche'-Maya*. 2000. Translated and Edited by Allen J. Christenson. Provo, Utah: The Foundation for Ancient Research and Mormon Studies(FARMS), Brigham Young University.
- Pop Wuj: Libro de Acontecimientos*. 1979. Traducción directa del manuscrito del padre Jiménez por Adrián Inéz Chávez. D.F., México: Centro de Investigaciones Superiores del INAH, Ediciones de La Casa Chata.
- Raxalaj Mayab' K'aslemalil=Cosmovisión Maya, plenitud de la vida*. 2006. Guatemala, C.A.: Programa de las Naciones Unidas para el Desarrollo, Guatemala(PNUD).
- Ri Mam*. 1995. Momostenango, Guatemala: Kajib' No'. 実松克義著 2000年『マヤ文明 聖なる時間の書—現代マヤ・シャーマンとの対話』現代書林。
- 実松克義著 2012年「ピソム・カッカ'アル(包まれた火)：「マヤの宇宙観」にみるマヤ思想の内容と本質について」立教大学異文化コミュニケーション学部紀要『ことば・文化・コミュニケーション』第四号、pp.69-101。
- Stross, Brian. 1983. Oppositional Pairing in Mesoamerican Divinatory Day Names. *Anthropological Linguistics*, 25(2): 211-273.
- Wisdom, Charles. 1940. *The Chorti Indians of Guatemala*. Chicago, Illinois: The University of Chicago Press.
- Ximénez, Francisco. 1929-1931. *Historia de la provincia de San Vicente de Chiapa y Guatemala de la orden de Predicadores. Tomos I, II y III*. Prólogos de J. Antonio Villacorta C.(Tomo I), de Jorge del Valle Matheu(Tomo II), y de Agustín Mencos F.

y Ramón A. Salazar(Tomo III). Guatemala, Centro América: Biblioteca “Goathemala” de la Sociedad de Geografía e Historia, Volúmenes I-III.

付録：20 ナワールと基本的な意味

(筆者作成：ナワール名はマヤ・キチュー語を使用した。)

数	ナワール	基本的な意味
1	バツツ	より糸、織物、始まり、統一、家族と村の意味
2	エー	道、運命、食べ物、菌、権威、旅
3	アッハ	トロモロコシ (の茎)、種蒔き、子供、家庭、家畜、豊かさ
4	イッシュ	山々、平野、大地、マヤの祭壇、ジャガー、力、エネルギー
5	ツイキン	鳥、よいこと、お金、生産、多産、幸運、自由
6	アハマック	祖父たち、死者たち、許し、力
7	ノッホ	知性、叡智、霊性、能力、理性、芸術
8	テイハッシュ	苦しみ、苦痛、病気、危険、両刃の刃、雷 (稲妻)
9	カウーク	雨、守護霊、稲妻、権威の棒、聖なる火と声の二元性
10	アッハプ	太陽、フナプ、説教者、霊性、ヴィジョン、よいこと、悪いこと
11	イモッシュ	水、海、不穏、争い、狂気、生産
12	イック	空気、自然、世界、祭壇
13	アカバル	曙光、オーロラ、夜明け、暗さ、生命の刷新
1	カット	火、網、正義、抑圧、囚われ、存在の中心、生命の継続
2	カン	蛇、ククマツツ、大地、尊敬、真実、黄色い地平線
3	カメー	死者の日、死、喜び、再生、静寂、よい行い
4	キエッヒ	鹿、力、労働、基本方位、聖なる棒
5	カニール	種蒔き、トウモロコシの種、食べ物、芽吹き、創造
6	トッホ	病気、苦痛、供物、罰、罰金、エネルギー、光
7	ツイ	犬、遊び、友情、権威、貞節、不倫、出産